

A sign with a wooden post and two blue arrows pointing in opposite directions. The top arrow is labeled 'Before' and the bottom arrow is labeled 'After'.

道しるべ

道徳通信

上尾市立太平中学校
道徳通信 第5号
令和6年10月11日(金)
発行者 校長 井浦 博史

野球部

1 学年職員

私は野球部の副顧問をしています。太平中野球部はみんな中学校に入ってから野球を始めた初心者です。今年度は、試合に出るための人数が足りておらず、他校と合同チームを組んでいます。合同先の学校には野球経験者が多く、試合に出る機会も合同光の選手の方が多いたが現状です。しかしながら、太平中野球部はそのような中でも全力で練習に励み、一生懸命野球に取り組んでいます。まだまだ芽は出ていませんが、本当に素晴らしい部員を見ることができて私は幸せです。

さて、そのような生徒と触れ合っていると、ふと今年の夏の甲子園で智弁和歌山高等学校の辻旭陽主将（3年）が選手を代表して行った宣誓を思い出しました。その中で野球のイチロー選手の言葉などを引用してこのようなことを言っていました。「努力したとしても、報われるとは限らない。しかし、努力しなければ、報われることはない。この言葉に励まされ、僕はここに立つことができました。そして、これからもこの言葉を胸に、最後まで戦い抜いていきます。この聖地で、思う存分プレーできることに感謝を忘れず、僕たちのプレーが多くの人に希望と、勇気と、感動を与えられることを願って、全力でプレーすることを誓います。」

努力の先に太平中野球部が試合のフィールド上で白球を追いかける姿を見ることを楽しみにしています。がんばれ、野球部！

「応援のつもりが応援されて」

2 学年職員

10月ですが、全国的に高温傾向にあり、この夏もとにかく暑かった。しかし、暑かったのは気温だけではなく、パリ五輪も、私の中では熱かったです。3年前の東京五輪は、新型コロナウイルス感染拡大によって、1年延期された上に、結局ほぼ無観客での異例の開催ただけに、今回はたくさんの観客と声援の中で盛大に行われたことは、とても喜ばしいことでした。そして、試合後のインタビューで選手は口々に、応援し支えてくれた方々への感謝を語っていることが印象に残っている。

そこで、「応援」について考えてみました。「応援」とは、辞書で調べると①力を添えて助けること、②競技・試合などで声援・拍手を送って選手やチームを励ますこととある。果たしてそれだけでしょうか…。

私は、幼少期に野球をはじめ、仲間と共に白球を追い、自分がどこまで通用するのか試したいと親元を離れ、高いレベルでできる環境にとびこんだ、一人の野球人を追っている。公式戦でチームが決勝に進出したことで、早速数時間かけて車を走らせ、観戦した時の出来事。大きなスタジアムには、部員、吹奏楽部、チアリーディング部、在校生、保護者などで満員。優勝目指し、熱戦が繰り広げられると同時に、スタンドでは、応援団長の指揮の下、応援にも拍車がかかり、私も見よう見まねで、全力で応援に参加。目標を達成しようとしている選手に「頑張れ！」と応援していると、いつしか選手だけではなく私自身も「頑張れ！」と後押しされているような感覚になった。これは初めてのことであった。応援には、計り知れないほどの力を持っていることに気付かされました。

最後に、熱戦が繰り広げられた新人戦、たくさんの練習を積んで挑む合唱祭、体育祭…、とにかく行事が盛りだくさんの2学期。ぜひ、クラス一丸となって、仲間のために、自分のために、競技に、応援に、全力で取り組み、楽しんでほしいと切に願います。がんばれ、太平中生！

パリオリンピックで感じたこと

3 学年職員

8月に開催されたパリオリンピック。夏休み中でもあり、皆さんも選手たちの活躍に目が離せなかったことと思います。有名な観光地を兩岸に見ながらの、セーヌ川での開会式。中学生がメダルをとったスケートボード、兄妹での連覇が期待された柔道、女子に初のメダルをもたらしたフェンシング・・・などなど、挙げたらきりが無いほどたくさんのドラマを見ることができました。

私が名場面の中で一番印象に残ったのは、体操男子団体戦の金メダル獲得です。途中、中国チームに大差をつけられながらも誰一人あきらめる選手はいませんでした。最後の鉄棒で金メダルを決めた橋本選手は「自分がミスをして、仲間がつないでいこう、諦めんなと声をかけてくれて、最後まで戦い抜くことができた。背中にみんなの思いを乗せて演技することができた。」と試合後のインタビューで語っています。お互いに声を掛け合い励まし合って、演技に臨んでいたのです。また、東京大会で0.103という僅差で金メダルを逃していた日本チームは、着地で一歩動いたり手足がわずかにずれたりする細かなミスをしないよう、0.1を捨てることに全員が意識して練習してきたそうです。

オリンピック選手という想像もつかないような努力やトレーニングを積んだ特別な人たちの経験かもしれませんが、私たちの生活にもつながるところがあると思います。あきらめてしまいそうなときの、仲間や声掛け。小さなことでもできることから一つ一つ丁寧にやって目標に近づく。体育の授業を中心に体育祭の練習が始まっています。みんなも真似できそうではないですか？

進路の悩み

養護教諭

小学校、中学校の義務教育が終わると、その先は、自ら進む道を選択して進んでいくことになります。3年生は、夏休みの三者面談を経て、進路について、具体的にできてきている頃でしょうか。まだ悩んでいて、具体的な進路のイメージができていない人もいるかもしれません。まだ、悩んでいる人、誰かに話をしていますか？相談していますか？

私は、高校3年生の進路先の選択で悩みました。養護教諭になるための選択肢は、当時、多くはありませんでした。インターネット環境もない頃ですから、さまざまところから情報を集め、調べた結果、埼玉の自宅から通える範囲内の大学で、自分が受験校として選択できるのは、埼玉に1校、東京に2校ということが分かりました。また、我が家の進学の条件として“現役で進学できるところ”、“自宅から通える範囲内”ということが挙げられていました。「養護教諭になりたい」という気持ちははっきりしていたものの、自分が受験できる選択肢の少なさを知り、不安と焦りを覚えました。自宅から通える範囲を越えて選択肢を増やせないか、進路を変えるべきか、高校3年生の夏まで心が定まりませんでした。受験勉強をして、合格を手に入れるしかないという頭では分かってはいたものの、そのような自信もなく、不安と焦りの風船が日に日に大きくなり、パンと割れて、ある日、親子喧嘩をしました。その頃の自分は、親に自分の気持ちや不安、焦り、辛さなどを正直に話すことができませんでした。どこか、親に反抗したい気持ちと親を不安にさせるまいという気持ちが入り混じっていました。

そのような状況で自分の悩みを正直に相談できたのは、当時、大学生の塾の先生でした。泣きながら自分の正直な気持ちを話すと、心のもやもやが落ち着いたのを今でも覚えています。「前進あるのみ」と、そっと背中を押してくれました。それからは、気持ちを切り替えて必死で受験勉強に取り組むことができました。少しずつ、自分に自信をもてるようになり、自宅から近い埼玉の大学に入学し、4年間学び、養護教諭の免許を取得しました。そして、今こうして、養護教諭として太平中に勤務しています。

進路の悩み、保健室でもよく聴くことがあります。そして、これからも聴きます。